

## ■ 授業者より

- ・本単元では、教材化の工夫、学習カードや動画を活用した指導の工夫、よりよく課題を解決する振り返りの充実の手立てを講じた。
- ・仲間と関わりながら、課題解決の仕方、記録への挑戦の仕方を工夫し、児童がタイムを短縮したり、競走したりする楽しさや喜びを味わうことができる学習を目指した。
- ・指導と評価については、重点内容を絞り、評価場面や評価方法を設定した。
- ・1時間目は試しの活動を行った。振り返りでは、課題を見付けるために連続図を活用した。ロイロノート・スクールの「提出箱」で仲間と課題を共有し、2時間目へと進めた。
- ・2時間目は、グループタイムによって自他の課題が焦点化された。振り返りでは、連続図への書き込み等で仲間との共有を図った。
- ・本時では、練習の仕方を工夫して動きを高めることをねらいとした。グループタイムでは、動画等を活用して、誰の課題を解決していくかを考え、練習の仕方を工夫した。
- ・4時間目には記録会を実施した。児童の要望から全員リレーを行い、学級の記録、グループの記録、個人の記録を測定した。
- ・毎時間後に自己評価（Google フォームで実施、質問項目に対して5段階で評価）を行った結果、「仲間との協力について」の項目が3時間目と4時間目に数値が上がったことが分かった。このことから、児童は、課題解決場面において、仲間と協力することを意識して学習できたと考える。
- ▲本時では、グループ練習ができないグループには、振り返りの視点を変えるなどの配慮が必要だった。
- ▲単元については、指導内容のさらなる重点化を検討していく必要がある。
- ▲思考・判断・表現の評価場面や評価方法については、前学年の学習内容や系統から、指導内容を明確にしていけることができると考える。

## ■ 研究協議（主なものを抜粋）

- 児童が仲間と動きを見合い、主体的に練習に取り組んでいた姿が印象的だった。課題や目的が明確であり、児童が見通しをもった状態で学んでいた。
- ◆振り返りについて、第2時の連続図に追記しなかったのはどのような意図か。→連続図に記入することもあるが、第2時は、課題の達成状況とその理由について考えるために、文章で記述することにした。
- ◆得意な児童が意欲的に活動できる配慮があったら教えてほしい。→ハードルをリズムカルに越えられる児童には、ピッチを上げる声掛けをして、タイムを縮められるような配慮をした。
- ◆リズムカルの定義とは？抜き足の指導は行ったのか？→歩数でおさえしている。昨年度は5歩でもよいと指導するとともに、3歩のリズムになるとタイムが上がることを押さえた。また、中学校との系統も考慮して指導してきた。ハードリングについては、抜き足は中学校の指導事項であるため取り上げて指導せず、上に跳ばないという程度としたが、今後の実践で検討していきたい。
- ◆体育科教育として、児童が自分の跳びやすい幅を設定して跳ばせるというのは難しいのか。→変えてもよい。児童への指導のために、3種類の幅のコースを実際に設定して、児童に選択させた。このような配慮をすることで、児童がハードル走の楽しさを追求できたのではないかと考えている。
- ◆記録にこだわる児童が多かった印象があった。指導事項との兼ね合いもある気がするが、授業者の想定を児童が超えた部分について教えてほしい。→運動としての滑らかさについても気付かせたかった。記録にこだわる児童が、自らの動きを客観的に振り返る機会が少なかった。動画も用意していたが使用する場面が少なかったため、今後は活用の仕方を検討していきたい。
- ◆児童の運動課題が7～8個あった。振り上げ足を真っすぐにし、上に跳ばない工夫があると、走り越せるのではないかと。また、直接比較をすることで児童は変化に気付きやすかったのでは。→多くの課題を解決させるための配慮が不足していた。グループによる対抗戦は直接比較ができるので、これからの実践に生かしていきたい。

## ■ 指導助言

### 上川教育局義務教育指導班 主任指導主事 菅野 裕介 様

- ・成果は、自己評価の中に表れていた。全ての項目について、2時間目よりも4時間目の方が向上していた。
- ・ハードル走が嫌いな児童が一定数いたが、楽しさを問う項目について、ほぼ全ての児童が高い評価をしている。素晴らしい結果である。
- ・上記のような結果が表れた要因は、指導事項と児童の実態を踏まえたバランスのとれた指導計画と考える。指導者は、踏切足、体のバランス、インターバルの歩数を例示しており、児童は、この3つをクリアすることでリズムカルに跳び越せる。つまり、これらを意識して運動することで、ハードルの行い方が身に付くように構成されていた。
- ・ハードル走は、5・6学年の計9時間で13個の評価規準を位置付けている。
- ・「課題発見」や「共生の視点」を取り入れていたことも構成の工夫と言える。ハードル走は個人種目の色合いが強いが、児童の実態に応じて共生を意識して位置付けていた。これが効果的であった。
- ・抜き足の指導が中学校の内容になるため、小学校では踏み越しの姿勢を扱わずともよい。
- ・3つの資質・能力をバランスよく身に付けることが重要である。誰もが運動に親しむことが大切である。技能に目が行きがちだが、ハードル走を通して身に付けてほしい体の動かし方や思考の仕方、判断の仕方、態度などをおさえて授業づくりに励んでほしい。
- ・ハードル走のスペシャリストを育成するわけではない。児童とこの点については、確認し合うべきである。また、今回学んだ体の動きが今後の種目にどう結び付くのかを児童と考えていってほしい。
- ▲学習カードや端末を活用しているが、より効果的な学習カードや端末の活用方法について見極める必要がある。ノートに書くのがよいのか、端末で記録するのがよいのか検討を重ねてほしい。

## ■ 指導助言

### 北海道教育大学旭川校 准教授

### 高瀬 淳也 様

- ・今体育で求められている、【する、みる、支える、知る】を意識した学習であった。
- ・単元の流れが「試しの運動から課題設定」、そして「多様な関わりによる解決」という順で構成されていた。
- ・教材については、学習機会の平等性、場の工夫（運動技能に合わせたハードル間の設定、紅白玉によるリズムとりの工夫）があった。これらが、児童の学習意欲を高めることにつながっていた。
- ・体育の授業では、試技条件を選択できるという特性がある。この特性を生かしたことで、運動技能に寄らずに誰もが楽しめる教材となっていた。
- ・6年生のハードル走は、リレー形式により仲間との関わりが起こる工夫があった。タイムを縮めるという目的により、記録への挑戦ができていた。個人種目といわれるハードル走に仲間との協力が生まれていた。
- ・「プレイ性の確保＝遊びの観点」である。ハードル走でのリレーという手立てがプレイ性を確保していた。
- ・バトンパスが分かりやすい。走っている仲間を自然と見るようになる環境が整えられた結果、楽しさや面白さが生まれたのでよかった。
- ・本単元は4時間扱った。4時間で技能を高めるのは難しいと感じた。
- ・先行研究から、インターバル速度の向上により記録が向上することが分かっている。このことから、3歩で走り抜けることも必要と言える。3歩にこだわるのが技術の向上につながると思う。先行研究では、楽に3歩で走ることができるインターバルを設定した結果、全体の7割以上の記録が向上した。タンタンのようなリズムを意識することでも、記録が向上することが分かっている。踏み切り角度を小さくするのは中学校の内容に近いので、小学生には難しい。ピッチを上げると記録向上につながるため、小学校では、児童が自分に適したインターバルの距離や、自分に適したリズムを見付ける指導を行うとよい。
- ・グループ学習の場面で、児童同士の称賛があった。授業者のハードルを楽しませたいという熱意が伝わるものとなって素晴らしかった。